

加藤九祚著 『シルクロードの古代都市——アムダリア遺跡の旅』

岩波新書、二〇一三年

服部 英二

世の中にはその現存自身が感動を呼び起こす人が極く稀にだけ居る。加藤九祚さんはその一人だ。ここ十数年続けてきて一応けりをつけたはずの、ウズベキスタンの古代遺跡カラテパの発掘を今年九二歳にして再開する、と言われる。驚く他はない。

私はかつてシルクロードのユネスコによる国際調査を立案・実行したが、その時世界史には中央アジアがすっぽりと抜け落ちていたことを実感、そのことを現代新書から出した『文明の交差点で考える』に書いたが、加藤さんこそその空白を埋めてくれる学者なのだ。思い起こせば私がシルクロード調査の構想を梅棹忠夫さんに相談したとき、民博の全部長を集めた中で、梅棹さんはためらうことなく加藤さんをユネスコの諮問委員に指名したのだ

った。以来パリ・ロンドン・モスクワ等での数々の準備会議で加藤さんといっしょに、喜怒哀楽を共にしたが、英語は得意でない加藤さんが「ソグド、ソグド」と何度も繰り返したのが忘れられない。あとで思えば確かに未だ解明されないこの民族の動きには中央アジアの謎を解くカギがあったのだ。

海が道であったように、大河もまた道であった。この本は、アラビア人には浮気な水と呼ばれ、ローマ人にはオクソスと呼ばれ、またイラン人には女神として崇められたアムダリアという中央アジアの大河の周辺に起こった、諸民族の混交、文化・宗教の成り立ちを解き明かすとともに、それらが人類の全文明史に直結していたことを納得させる。タジキスタン・ウズベキスタン・ア

フガニスタン・トルクメニスタンがイラン・インド文明を解明する鍵となるのだ。

加藤さんは軍人として満州にいた時終戦を迎え、ソ連軍の捕虜となり、シベリアに連行される。これは「暁に祈る」等で描かれたように数千の軍人がたどった悲しい道だ。しかし加藤さんの違いはここで発揮される。他の人びとが厳しい労役と寒さに耐え、ひたすら日本への帰国の日を待ちわびていた時、ドイツ語科出身の加藤さんはこれを機会ととらえ、ロシア語を勉強しようと思いつく。そしてそれを成し遂げ最後にはモスクワ大学で学位を取得するまでになるのだ。

本書は、中央アジアの大動脈ともいえる大河アムダリア地域には、伊東俊太郎氏の説く古代の「文明交流圏」がもう一つあったことを明らかにする。しかもそれはユーラシアの東西を結んだシルクロードの一つの軸になっているのだ。それによって初めて古代ギリシア・ヘレニズムと大乘仏教を産んだガンダーラの結びつきも説明される。アムダリアとインダスを結ぶ線があったのだ。バクトリア・ソグディアナはギリシアの神々や思想を東方に運ぶ。アケメネス朝によって強制移動されたギリシア人がバクトリアに現れ、ギリシア文化の諸要素がこの地に広がる。ギリシアの建築の技術の高さ、ギリシア神話とゾロアスター教のアヴェス

タ神話の間の一定の共通性がこの文明間対話を促進させた、という(二三四頁、リトヴィンスキーのいうギリシアのイムパルス)。そうすると、アレクサンダー以前にヘレニズム的なものが生まれていた、ということになる。

加藤さんは昨今まで一〇年間にわたって「アイハヌム」という一人雑誌を出し続けてきたが、文明間対話の象徴と言えるアイハヌムというこのヘレニズムの古代都市の名を冠した研究書に私は加藤さんの意気込みを感じていた。本書にはこの一人雑誌での研究成果も収められている。驚いたのはこの本に引用された欧米の研究書の多さだ。そして他人の追隨を許さない加藤さんの絶対的強みはロシア語文献の紹介である。英語・仏語だけで研究するのには限界があることを思い知らされた。考えてみるとこの地域は永らくソ連領であったのだからロシアの探検隊による研究が一番進んでいて当然なのだ。一九六〇年代アイハヌム遺跡の発掘を行ったフランス隊のポール・ベルナル等はもちろん出てくるが、この本に含まれる研究の一番の出所はロシアの学者たち、中でもボリス・リトヴィンスキーである。彼はタシケントに生まれ、古代バミールの考古学的研究を行った学究であるが、加藤さんとは知己の間柄で、二〇一〇年まで生き、五〇三点の論文を残している。タジキスタンの多くの古代遺跡の発掘は彼の手によるもの

だ。私自身ニサで見事なりュトンを見たことがあるが、その発見者はそれを発表したマッソン夫妻ではなく、リトヴィンスキーの奥さんであった、とはこの本で知った。

本書で読者はアムダリアの流れを神としたタフティ・サンギンのオクス神殿の意味、アケメネス朝の進出、アレクサンドロスの道、そしてヘレニズムの運命を知るだろう。そして、とりわけ私の注意を引いたのは「宗教改革者ツァラトゥストラ」の解明である。

ニーチェの画期的な本の題名にもなったツァラトゥストラは、別名ゾロアスターだが、突如として現れたのではない。原ゾロアスターと呼びうる信仰がイラン・インドにそして中央アジアにあった。古代イラン人は星辰・日月・地水火風には神が宿ると信じ、世界の秩序を確保する自然の法則があると考えた。イラン・インド語ではそれはルタまたはリタ (ṛta) であり、『アヴェスタ』ではアシャ (asha) である。それは「真実」も意味する。火はアフラ・マズダの息子であり、水はその娘なのだ。それがアナヒタであるが、このアナヒーターはアムダリアに他ならない。これがインドでサラスヴァティーなる河の神となり、シナから日本にわたり弁財天になった、と私は考えている。

このようにヘレニズム以前に遡る長い時空が語られると、文明

間対話は多くの地域で驚くほど長い歴史を持ち、精神革命もそのような土壌の上に初めて生まれるのだ、と気が付く。バラモン教（あるいはインド教）の流れの中にブッダ・釈迦牟尼が、ヘブライズム（あるいはユダヤ教）の流れの中にイエス・キリストが改革者として現れたように、ツァラトゥストラすなわちゾロアスターも突如として現れたのではない。イランからアムダリアに広がる古いプロト・ゾロアスターの信仰の中で改革者として現れたのだ。その啓示の受け方はユダヤ・キリスト教の改革者ムハンマドを思わせるものがある。のちにこのゾロアスターの思想がバビロンでヘブライズムに影響を与え、聖書の重要な一部を形作ることを思えば、われわれは加藤九祚さんの足跡を追いつ、それを生み出した中央アジアの複雑な精神交流の実態を探るべきであろう。本書はその歩みに絶好の手がかりを与えるものである。